

芥川だより

発行日 ***2015年8月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

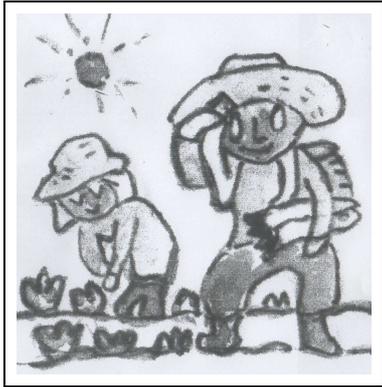
高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL 072 - 681 - 8870



***** 一部50円です *****

ガンコだった祖父たち



夜明けから日暮れまで野良仕事に明け暮れ、遊びなど論外の人生だった。昨夜のうちに草刈りカマを研いでおき、夜が白々と明けるのを待って草刈りに出る。草刈り場は田や畑の岸である。朝露が残る草を刈り取って束にし、わら縄でしばった束を、ひとつふたつと人の丈ほど積み上げ木で作った背負子でかついで家にかえり牛のえさにする。大根の漬物と麦の入った飯で朝食を食べ、休むことなく仕事にでる。

山に行くときは、大きなアルミ缶の弁当に飯をつめ梅干と丸干しをのせていた。まるい大きな水筒に茶をいれて持っていく。

夏場の山仕事は、雑草の下刈りである。杉や栗の木の下にはえるススキなどをきれいに刈り取る。刈り取った草で牛のえさになりそうな草は持ち帰る。田んぼの草引きや草刈り、とにかく毎日が草刈りなのである。あばら骨が目につくやせた祖父は、病気で休むことなく毎日毎日野良仕事に明け暮れた。

そんな祖父とお盆の墓そうじをしていた時、「おまえは、大きくなったら大学に行くやろなあ」と言った。おさないう小学生であった私は、「えっ」と不思議に思った。中学を出て働きに出るぐらいは想像できたが、大学までは。尋常小学校しか行かずとも世の中の流れを爺さんは知っていたのである。となりの爺さんも私の祖父に負けず劣らぬガンコな人だった。競争するかのよう働きとおした。

明治生まれの爺様たちは、山奥に生まれ外へ出ることなく一生を終えたのだが、その生き方は私に奥深い生きる事への示唆を与えてくれた。自然のなかで生きるとは、日々変わりゆく自然の中で、おのれとのたえざる対話の時間を演出することなのだ。無言で語りかけてくる草花にこころを励まし自問自答を繰り返す。ひとは投げかける問い以上のものはつかめない。がんこな祖父の生きざまを思い出して、がんこさが秘めるこころ模様を想像するのである。

死をめぐるあれやこれ (13)

「1984」

石川 吾郎

これはむろん村上春樹ではなく、英国の作家ジョージ・オーウェルの一九四九年の作品。当時から三十五年先の未来を描いた反ユートピア小説。最近この国の政治をみるにつけ、この小説が盛んに気になる。◆旧ソ連のスターリン体制をヒントに描いているといわれる。そこでは三つの巨大全体主義国家が並立して互いに戦争をしている。その一つではビッグブラザーが支配して、国民を完全にコントロールをしている。人の思考の中で徹底した監視と密告、情報統制、逮捕・拷問など。三十五年先ではさすがにまだオーウェルの予想に追いついていなかった現実が、七〇年先にはそのような世界が実現するのではないかと思わせる節がある。二十一世紀になってこのような全体主義の国が複数存在しているのは確か。七十数年前には、まさにわが国がそのような国であった。問題は現在の日本の安倍政権が、実にそのような国への回帰を目指していることにある。

◆現代の日本にはこのような社会への曲がり角を曲がらせようとする強大な圧力が存在している。我々がこの地獄社会への曲がり角を曲がる歴史的な生き証人になるのかもしれないというのは、杞憂ではないと感じる。◆だがこのおぞましい曲がり角を曲がることを止めることができないうけではない。それには、多くの人にその危機を知ってもらうことがまず必要になる。小紙がそれにも役立つことを願っている。◆「戦争は平和である」「自由は屈従である」「無知は力である」というのが、ビッグブラザーの支配する党の三つのスローガンなのだ。これは現政権の姿勢になんと酷似していることか。

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1
◆ TPP 特集 2		
みんなで知ろう日本の危機 ② 伊藤明……………	2	
TPP が連想させるもの 下村嘉明……………	5	
おつちよこちヨイぼけ 29	A O	6
世界一周旅行記 15	若山哲郎	7
素老人・よもだ帳 17	坂本一光	8
大人の今昔物語 13	石川吾郎	10
哲學屋のつづき 14	祖蔵哲	12
サラリーマン渡世譚 27	明石幸次郎	14
八月十五日	大江雄鬼	16
『芥川だより』愛読者の皆様へ 上田幸男		17
編集後記	嘉	17
女 90 年の軌跡	眞粧	18
俳句	土田裕	18

TPP 特集 2

みんなで知ろう日本の危機 (2)

伊藤 明 (精神科医)

TPP は日本の社会を破壊する

◆はじめに

前回からの一ヶ月間、戦争法案の衆院

強行採決は、安倍政権が憲法と民主主義に敵対し、また大部分の国民に敵対し醜いキバを向けているという、危険な本性をはつきりさせました。

安保法制が成立してしまうと、日本は米国が起こす戦争の下請けとなり、自衛隊員や国民の生命を危険にさらし、米国の軍事産業から莫大な金額で武器を購入することになるのです。そして流されるのは日本人の血であり、使われるのは日本人の血税なのです。

実際この違憲の法案が衆院を強行採決された日、「日本の軍事役割拡張は米国防総省とその軍備業者にはグッドニュース」と米紙が伝え、日本政府が事故の多さで有名なオスプレイを五機四一〇億円で購入する(計一七機三六〇〇億円を予定している)ことを決定したことが伝えられました。ある外国人学者は一連の経過を見て安倍政権のすることは「憲法クレーデータ」と表現しましたが、まさにその通りです。この戦争法案は国民の反対運動の盛り上がりで、参院で廃案に追い込むことが絶対に必要です。

ところでこの戦争法案と同じくらい、あるいはそれ以上に日本の社会を破壊してしまう危険性をもつのが、現在交渉が進められているという TPP (環太平洋経済連携協定) です。

今回は、この TPP のもたらす危機とその背景について考えてみます。この問題については、大手マスコミがそろって

まともな報道をせず、国民にその実態を伝える使命をはたしていません。全国紙五紙が何と TPP 賛成の社説を掲げて、少しも本質的な批判をしようとしていません。このままでは日本のマスコミにとっても、文字通り歴史的・致命的な汚点となることでしょう。

◆ TPP と新自由主義 (グローバルイズム) のもたらす危機 - 民主主義を破壊 -

TPP は「関税を撤廃し、太平洋を囲む国々が、人・モノ・カネの移動を自由化しようという貿易協定」というように一般には解説されます。このように国家間の関税や各種の規制を取り払い自由貿易を目指す行き方は「新自由主義」あるいは「グローバルイズム」ともよばれます。貿易や人の流れが盛んになるのは何となくいいように感じるので、「いったい何が問題なの?」と感じる方も多いと思います。しかしこの背後には、従来の「国家」というものについての我々の常識からは信じられない驚くべき「謀略」といっていいものが進行しているのです。

この「新自由主義」は、世界中の国々を国家という枠を超えてグローバル大企業が儲ける市場に作り替えようとするものです。民主主義に敵対して、民主主義的な各種の制度や規制といった、儲けの邪魔になるものを「規制緩和」の名のもとに破壊していくのです。

そのやり口は一見「合法的」ですが、憲法の保障する人権や「文化的生活」と

いった概念を無視し、社会福祉など国民生活を守るための社会的なしくみを壊し、この国を弱肉強食の世界に突き落とすのです(米国社会はすでにこのプロセスが進行してしまい、国民の多くの貧困化が進んで極端な格差社会になっていると言われていますが、日本もすでに米国に近いほど貧困化してきているといわれています)。尚このような規制緩和は(存知のように小泉内閣の時代からわが国で加速しており、郵政民営化はその最たるものでした)。

そして TPPこそが、この日本の国を弱肉強食の世界へとさらに「効率よく」引きずり込む良に他ならないのです。(このように書くと、大げさすぎるのではないの、という声が聞こえてきそうですが、私自身もつい最近までそんなことが世の中にあるとは信じられなかったと思っています。しかしいろいろ調べてみると本当のことなのだと確信するようになって、この文章を書いているわけなのです)

◆ TPP は日本社会のすべてを「投資」の対象にする

関税を撤廃し、人・モノ・カネの移動を自由化しようという貿易協定と解説される TPP は、農産品などの関税交渉が中心になっているといった報道がなされて、それ以外は秘密交渉(このこと自体、憲法が保障する「国民の知る権利」を侵害している)としてマスコミ報道にはほとんどされません。しかし TPP の本質

は「日本の社会のすべての分野を投資（つまり儲け）の対象としてみよう」ということにあります。

日本の社会には、国民の文化的な生活を守るための様々な仕組み、社会保障の制度が完備しています。たとえば、だれもが保険証一枚で日本全国で医療を受けられるという国民皆保険の制度、医療費補助制度、また介護保険制度、相互扶助のための各種の共済制度など、これらはいわば社会的なインフラであり、病院・診療所・保険薬局、介護施設、共済組合など営利を目的にすることは許されていません。しかしTPPはこういった分野を含めて、社会のあらゆる分野を市場として儲けの対象として、「解放」することを要求してきます。これはどのようになされるのかといえば、ISD条項がその強力な武器になるのです。

◆ ISD条項の恐ろしさ

ではISD条項とはいったい何なのでしょうか。これはTPPなど自由貿易協定には必ず付いてくる条項で、そもそもTPP締結の主要な目的がこのISD条項の締結であるとも言われているほど重要なものです。これは「日本に投資を行った資本（外資）が、日本の諸制度が原因で、期待した利益が得られない場合に、世界銀行傘下の裁定機関に提訴し勝利してしまうと、裁定機関の決定が強制力をもち、国内の制度を強制的に変更できる」という驚くべき内容のものです。

この裁定機関（国際投資紛争解決センター）は米国の影響力が非常に大きく、米国が決定的に有利であり、その裁定の基準は純粋に「投資に好都合かどうか」という観点で行われ、国民の人権や生活などの観点は一切ないというものです。しかも裁定は一回限りで控訴できないことになっている（一回の裁定で決まり！）。これまで裁定の実績は圧倒的に米国が有利で、一〇〇%米国が勝利をしているのです。この裁定が出たら、日本の国内法を曲げても、ISD条項ゆえにそれに従わなければならないというのです。

そもそも国内の法的規制などは国民の安全を確保するために制定してあるはずなのに、TPPが国内法を超越してしまうのです。たとえば日本には食品の遺伝子組み換え大豆の表示義務の法的規制があります。TPP締結後には、これが輸入大豆の販売に障害になるとISD条項により米国企業が提訴すれば、ほぼ必ず表示義務の規制撤廃の裁定が出ることになり、日本は規制撤廃と巨額の賠償金をその米国企業に支払うことになってしまうのです。（ここまで書いてきてふと、日本の銃規制はどうなるのだろうか、日本の銃規制は自分たちの商売の障害になっていない！日本社会に拳銃やライフルがあふれる日も近いのだろうか）

これは国内法よりISD条項の裁定の方が上にくるといって、非常に不条理で、許し難い深刻な状況です。日本国内の立法は、国民の意思をもとに日本の国家としての主権として行われるもので、他国の私企業が口を挟む筋合いのものでは全くありません。このISD条項は、国家の自主決定権を侵害してくる、これまでの我々の常識では考えられないような代物なのです。実際このISD条項は、**国連も人権上で問題が大きいと懸念を表明している**くらいです。

前回にTPPと同様のISD条項を米国の間で締結しているカナダの例（健康被害が懸念されるガソリンの添加物禁止の規制を米国企業から提訴され、裁定で負けて規制撤廃と莫大な賠償を支払わされた）をあげておきました。さらにTPPには、ISD条項の他に「**ラチエツト条項**」というものも含まれています。これは上のようにISD条項でいったん**法的規制が撤廃されると、二度とその規制は復活できないという、恐ろしいもの**です。なお「ラチエツト」というのは、一方だけに回転できるねじ回しのような道具のことを指しています。いづれにせよ、このような国家としての自己決定権・主権を侵害するISD条項は憲法違反の疑念が濃いものです。しかしいったんTPPが締結されてしまうと、国家間の取り決めなので、その廃絶はきわめて困難なものになってしまうのです。この意味でもTPPの締結は絶対に阻止しなければならないと思うのです。

◆医療・介護分野がねらわれる

伝えられるところでは、TPPによって米国政府は日本の特定の分野に特に標的を絞っているといわれています。その代表が、医療・介護分野と、六〇〇兆円にも上るといわれる国民の財産郵便貯金・かんぽ・JA共済、それに酪農分野などで、これらが壊され奪い取られるといわれています（すでにかんぽ・郵便局はアフラック生命ガン保険の下請けにされてしまっています。これは郵政民営化の一つの帰結）。

ここでは私の職業に関連する医療保険の分野について考えてみます。なぜ医療分野がねらわれるかといえば、まず第一に米国オバマ政権に多額の献金をして大統領を操っているのが、アヒルのCMです。すでに日本社会に浸透してきているアフラック生命を代表とする米国の大規模医療保険会社や、巨大製薬会社であること。（米国では企業献金は禁止されています。個人献金は無制限とされ、その結果二大政党のどちらが政権をとっても**米大統領は献金者の利益の代弁者になり下がっているのが現実**です。その献金者がまさに巨大生命保険会社や軍需産業のトップや投資家たちなのです）

日本の医療分野は現在、各種の規制で守られており、その上に立って国民皆保険が成立しています。この規制を破壊す

れば、米国の巨大保険会社や製薬会社に
とっては莫大な市場が生まれてくること
が容易に予測できるので（こういった
巨大会社は米国内でオバマの保険制度
によってすでに巨額の利益を上げていま
す。この点は堤未果さんの最近の著作に
詳しく描かれています）。

医療分野の規制は実に多くのものがあ
りますが、代表的なものはまず混合診療
の禁止。そのほかに株式会社の参入の禁
止、さらに薬価制度などが思い浮かびま
す。TPPが締結されることになれば、
これらの規制がまず標的になるだろうこ
とが予想できます。

〈混合診療〉

米国の巨大保険会社や製薬会社は、と
にかく日本の社会に自分たちが莫大な利
益を得ることのできる巨大市場をつくり
だすことを目指します。そのためには、
現在の日本の国民皆保険制度を部分的に
も崩壊へ導き、自分たちの商売する余地
を拡大しようとします。

混合診療は、保険診療と自費診療を混
在させることが可能とするものです。現
在では歯科しか認められていません。し
かしこれを一般の医科まで拡大すると、
保険の範囲での医療行為と保険のきかな
い医療行為で差別ができます。おそらく
効果の高い最新の技術や新薬は、自費診
療ということになり、自己負担金が跳ね
上がることとなりますから、公的保険の
他に、国民は私的な医療保険に入らなけ

ればならなくります。ここに大きな市
場が生み出されます。もうすでにガン保
険などがアヒルとブラックスワンのCM
で流され、侵略を開始していることはご
存じの通りです。

〈株式会社への参入〉

第二には、病院や診療所の経営に株式
会社を参入させるということ。株式会社
の目的は最大の利益を追求して、その利
益を株主に還元するという点にあります
から、医療・福祉のあり方とは根本的に
相容れないものです。実際に米国では、

株式会社による病院経営・介護施設経営
がなされており、高額な料金を払える人
は最先端の治療を豪華な環境で受けられ
るが、お金の払えない人々はそもそも医
療や介護から排除されるか、ごく粗末な
ものしか受けられず、悲惨な状況に陥っ
ているということ（これも堤未果さ
んの著書に詳しい）。混合診療により病院
同士のサイババル競争を激化させること
になり、果てしない人件費削減競争に病
院が巻き込まれていくことになり、医療
の質の低下を招くことは明かです。さら
に倒産する病院も多くなることが予想さ
れます。この過程を進めるためには、す
でに成立した「経済特区」の制度が悪用
されることが予想されます。

〈薬価制度〉

さらに日本の薬価制度が問題にされる
可能性が大きいのです。日本の薬価の決
定の仕組み自体が、ISD条項によって

提訴される可能性が考えられ、これが破
壊されてしまうと、薬の値段が製薬会社
の言いなりになり、米国のように途方も
ない値段になってしまふことが予想され
ます（米国の薬価は製薬会社の言いなり。
また新薬特許はTPPの知的財産保護の
対象になり特許期間の延長を米国は主張
している。これは薬価が下がらなくなる
を意味する）。一粒数万円といった抗ウイ
ルス剤や抗ガン剤なども現に存在してい
ます。これほど高価な薬を、健康保険を
適用して使えば財政的にもたなくなる。

しかしこれもISD条項で提訴されれば、
保険適用せざるを得なくなる。結果どう
なるか。日本の保険制度はたちまちのう
ちに破綻してしまふのは目に見えていま
す。すると政府は当然保険料の値上げを
国民に求めたり、さらにはジェネリック
医薬品しか保険の適用ができないとか、
薬剤については保険が適用されないとす
るといったことを提案してくることに
なるでしょう。

優れた効き目をもった新しい薬剤が目
の前にある。使えば人の命を救うことに
なる。しかしそれはあまりに高価で庶民
には手が出せない、ということが日常的
に起こってくることになるでしょう。金
を持つ者と持たざる者の格差が、もつと
も残酷な形で我々の日々の生活の中に身
近に現れてくることとなります。命が大
事であれば、持たざる者もなげなしの財
産を薬のためになげうって薬を購入する

ことになる。その結果、中流階級であつ
た人もローンまみれになって貧困層に転
落していく。こういったことはもう現
に、米国の国内ではありふれて見られる
ことなのだとは、これも堤未果さんがそ
の著書の中で明かにしています。このよ
うにして、世界に他に類をみない優れた
日本の国民皆保険制度が、たちまちのう
ちに壊されてしまうことになるのです。

日本を貧困化先進国・米国の社会の二
の舞にしてはいけない。TPPは格差を
拡大し、国民の大部分を悲惨な奴隷的状
況に陥れる悪魔的な仕組みなのです。国
民的な反対運動で是非ともこれを阻止す
る必要があります。

なお米国民の間でも、このTPPに対
する反対運動はさまざまな形で盛り上
りをみせていることを、七月十九日付け
の新聞「赤旗」は伝えていきます（他のマ
スコミは伝えない）。このことはTPPを
めぐる対決は国と国との対決というより
も、実は米日グローバル企業とその利益
のために奉仕する日米政府、それに対す
る日米の国民（その九九％）との間の対
決であり、それぞれの国の国民は、TPP
の犠牲になるという点では同じ立場で
あり、連帯することが可能であることを
見ていく必要があるだろうと思います。

◆おわりに

TPPと報道機関について再び触れて
おきます。TPP締結反対を国民的な運
動にしていくためには、草の根運動は欠

かせないものです。しかしマスコミ(の一部)がTPPとくにISD条項の反国民性・反国家性について説得力のあるキャンペーンをはれば、それだけでも状況は大きく変わってくるでしょう。このことは、このほど戦争法案が衆院で強行採決にいたるまでの過程で、政府の圧力で一時期は萎縮しきっていたマスコミが三人の憲法学者が国会で違憲であると述べたことをきっかけにして息を吹き返したことからよく分かります。

ところがTPPに関して、マスコミは本質的な批判報道はほとんどしていません。これはTPP交渉が秘密裏に行われていることだけでは説明がつきません。なぜならISD条項はすでに米韓FTAにも北米各国間のFTAにも存在して、米国のためのみに、すでに効力を存分に發揮しているのですから。さらに日本の報道各社は外資は二〇%までという出資規制で守られています(そうでなければ外資がマスコミを乗っ取り国益に反する報道を多く流すようになることから)。ところがTPPが締結すれば、ISD条項によりこの規制も外される可能性が高くなります。つまりTPPに反対キャンペーンをしないマスコミは、自分の会社が外資に乗っ取られるのを指をくわえて傍観しているだけ、ということになります。だが常識的には考えれば、これはあまりにも不自然ではないかと思われまふ。とすれば可能性としては、マスコミ各社の

トップが政権と何か密約を交わしてのではないかという疑念が浮かび上がります。もしそんなことがあるとするなら大スキヤンダルになることでしょう。

ではTPPを阻止するためには、どうすればよいのか。まず国民が上のようなTPPの内容の実態を知らせていくこと。さらに戦争法案反対の運動とともに、反TPPの国民的な運動を盛り上げていくことが重要になると思います。このような運動は日本の各地で始まっているのです。

《参考》

ジャーナリスト堤未果さんの出ているユーチューブの動画「政府はいつも嘘をつく」はISD条項の恐ろしさをよく伝えていています。また米日政府とグローバル企業の癒着構造の指摘は衝撃的で必見の動画です。その他彼女の出演する動画はいくつもあり、どれもわかりやすく鋭い分析をしておられるのでおすすめます。彼女の書いた本、とくに『沈みゆく大國アメリカ 逃げ切れ!日本の医療』(集英社新書)、『政府は必ず嘘をつく』(角川SSC新書)などもぜひ読んでいただきたいもの。そのほかに動画としては、孫崎享(うける)氏、内田樹(氏)、古賀賀明氏、などの出る動画も参考にあります。

またブログでは、「植草一秀の『知られざる真実』が日本の危機に、鋭い指摘をされていて参考になります。さらに

これらの方々の著書は、日本の現状を考える上で非常に参考になります。

《追加》

八月一日「ハワイで行われていたTPP交渉関係会合は、十二カ国全体の大筋合意を見送り、閉幕した。」との報道がありました。これは当然の話で、米国外の各国がほんとうに国民のことを考えるならば、ほとんど純粋に米国の大企業のためのTPPなどは、締結できぬわけがないのです。

それに引き替え、秘密のうちに裏切りの譲歩ばかりを繰り返して、米国と一緒にあって、日本の国の富を米国企業に略奪させるようなTPPの締結に、ひたすら突き進んだ日本政府の異常さが際だっています。つまり現在の日本政府が、国民の利益を守るどころか、売国行為を繰り返していることを示しています。

TPPへの圧力はこれで消えるわけでは決してありません。日本の富をねらう米國勢力の陰謀はとほうもなく強力で、今後も二国間とFTAといった形でも圧力をかけてくる可能性は大です。これに対抗するには、国民の多くが団結して選挙で真の意味で、1%の富裕層のためでなく、多くの国民の利益を代表する政府を樹立することが必要なのです。

TPPが連想させるもの

下村嘉明

まわりの人にTPPの話をして話も通じない。「そんな悪い条約じゃあないやろ、ようわからんけど」といった具合だ。原発よりはるかに理解がされていない。

こんな事から、私は想像した。「TPPの先にあるものは何か？」それは、むかしの奴隷制度ではないかと。自由主義と民主主義を旗印に我々は進んでいると思っていたが、そうではなさそうだ。

◆もし、私が世界有数の大金持ちだったら、何を考えるだろうか？

まず、一番目は今の暮らしを維持したい。個人的には健康である。次に財産の保全、次世代へ引き継ぎ一族の繁栄と安泰をかんがえる。

金はいくらでもあるのだから、最高の医療を受けたいと、自分たちだけの治療・研究をする病院を作るかもしれない。優秀な研究者たちを集めて自分や家族のための施設をいくつも作り、それらを競い合わせてより高度な医療機関にして自分の健康と長寿を願う事だろう。

そのためには、持っている資産を維持しなければならぬ。いちばん困るのは革命である。資産が没収され一族が捕えられる事だけは絶対に避けたい。

資産をスイスやアメリカなどに分散す

る。一族のみんなも分散してアメリカやイギリスなどに留学・居住させる。遠くに離れていても自家用のジェット機を好きなように飛ばさせることが出来るから問題はない。もちろん就職して働く必要などないから、毎日が日曜日で自由に来る。電話ひとつで何でもできる。

では、大金持ちの自分がいちばん心配する事は何か？多くの人達が、いくら働いても楽にならないこの社会のトリックに気づき反乱を起こすことである。

金持ちからすれば、人は平等で自由などは、口だけのうたい文句で、実は違ふと思っている。自分たち選ばれし者のみがこの世を治めていて大衆などは、鳥合の衆にすぎず何も知らない者たちだから適当にあしらえばいい。

しかし、その中にいる社会改革を狙っている者には注意をしなければいけない。金で釣って懐柔できる者はやりやすいが、そうでないものは始末が悪い。でっち上げのスクャンダルや冤罪を部下たちに命じてやらせるのがよい。そうすれば世間の人は自分がやったと気づく事など無いだろう。

賢そうな者は、それらを集めた研究施設に囲い、平均より多めの金をやり彼らの不満を消し、プライドという訳のわからぬ自己満足に酔わせておけばよい。

また、大衆が団結しないように互いに反発しあうように何事にも差別意識をありたてる。団結するのが一番困る。

最も注意を要することは大衆の動きだ。昔の鎖に代わり今は金で大衆を管理している。一見すると自由で平等のように見えるが、実は鎖よりも強固な金の力で縛り付けているのである。

法律や常識、警察や議会などは、大衆を縛り上げるためのものであつて金持ちには都合がよい。学校制度も金持ちには大変都合がよい。議会制度も大衆が不満を爆発させないために都合が良い。

かくれた金持ちに大衆の不満の矛先が向かないためには、議会制度や選挙制度は有効だ。またテレビなどのマスコミは大衆に社会の根本的な矛盾、一部の金持ちがこの世界を支配していることから起こる様々な事柄を大衆の個人的な問題に矮小化する為の宣伝機関であるからだ。

それにしても世間の人は馬鹿だなあ。子供に多額の教育費をかけて私たちの企業に就職させこき使われても嬉しそうに一流会社の〇〇会社に勤めています、などと吹聴するのだから。わざわざ自分たちから進んで企業にさし出し奴隷になりたがるのだから、信じられん。

スポーツもそうだ。小さい時からスポーツクラブに入れて金と時間を使い企業金の儲けに利用されているのだが、そのことに気づかずプロの選手を子も親も夢見ている。宝くじに当たるよりも確率は少ないと言うのに。

二十四時間管理されるかのように、人は動かされる。家族で過ごす時間はなく

なりみんながバラバラになる。ゆっくり話をする時間もなく働きローンに追われる。

金持ちからすれば、これらの状況は良いことづくめだ。人が孤立しストレスで参っている程度がやりやすい。すべてを自己責任と責任転嫁をして政治の間違いを隠すことができるから。人々が適当に困っている方が都合いい。

みんなが楽しく幸せに暮らしておれば、よからぬ相談をして政治批判につながるからだ。たまに仕掛けるあく抜ききの為のデモなどは、こちらからヤラセでやっているから問題はない。人はしょせんバカで臆病者だから、このままで当分はいけるだろう。

しかし、私の欲は果てしない。さらに強固な地固めを考えた。国境を越えた経済圏をつくり、自由に世界中から儲かるようなシステムにしよう。上手くゆけば多くの国民を奴隷のように働かせることができる。その手段がTPPなのだ。中身がバレたら大変だから秘密に進めなければいけない。

こんな事を連想したのですが、バカな想像でしょうか？あなたは、どう思いますか。

連載「おっちょこちょいぼけ」(29)

——昭和女、どっこい日記——

大阪のおぼはん、

しつこくアベ糾弾……の巻

安倍総理のバカっぷりが止まらない。

聞かれました？ 「アベシンゾウは生意気だから殴ってやる、という不良がいて困っていたら、アソウ(多分、麻生)君が『オレはケンカが強いから守ってあげるよ』って言うてくれて、そのアソウ君が不良とやりあうことになったら、私が加勢するのは当たり前ですよね。」

ま、なんかこんな話だった。「アソウ君」を、インタビュー相手の女性の名前に変えたりして姑息に受けを狙っていたバージョンも見たが、この際、そんな枝葉末節はどうでもいい。

国際社会において他国を「不良」と決めつけることにも疑問を感じるが、そもそも一体、だれのことよ？ 北朝鮮？ 中国？ ロシア？ あるいはホルムズ海峡あたりに出没すると想定している仮想敵国？

こんなバカ話を「たとえ話がわかりやすい」と言っているという日本人もいるらしくて、アホちゃうか？と腹が立つが、この際、それもどうでもいい。

「不良」と話し合うこともせず、自分よりケンカの強そうな相手に守ってもらうのが当然、という態度。それでいいのか？ 「不良」という括りで会話の余地はないと決めつけ、アソウ君の武力におす

がりする。そして、ケンカになったらアソウ君に加勢し、相手をボコボコにすることを「是」とする、その道徳観の欠如。安倍総理に聞きたい。ケンカの強いアソウ君と組んで不良とやりあって、その後、どうなるんです？ アソウ・アベシンゾウ組が勝ったとして、ボコボコにされた相手が、すぐに猛反省して、「ごめんなさい。これからは乱暴をしません」と謝ってくれるとでも？

間違いない、そのケンカは泥沼化する。拡大する。最初はこぜり合いでも、組んだ相手がお坊ちゃまのアソウ君ではなくてアメリカであれば、たちまち紛争になり、戦争になる。理由は簡単だ。武器商人（「巨大資本」として認識されているのではないのかな、よくわからないけど）が自分たちの富の拡大を図ろうとして、しなくてもいい戦争をしよう、しようとしていくからだ。

アベシンゾウはわかってないな、そういうこと。自分が何に加担しようとしているのか。日本の役割は、強いところと組んで、よそをやつつけることではない。自分たちが生きたいように、よその国の人々も平和に生きたいと願っていて、「不良」（武器商人と軍人、一部の政治家と解釈してほぼ間違いないだろう）はその国の少数派に過ぎないこと。だから、日本は（前の戦争で、本当に戦争は怖いね、厭だね、二度と同じ間違いは繰り返しませんと亡くなった人たちに誓い続けている日本は）、どこまでもどこまでも平和にこだわらる。そんなスタンスで外交を続け

ることを世界の人たちは望んでいる。

「そんなんで世界の脅威から国を守ることも思っていないの？ 甘いワ」という人に聞きたい。じゃ、アメリカと組んで、本当に日本の平和が守れるんですか？ 集団的自衛権を行使する、となったら敵国とみなされて戦争のリスクは高まる。だのに、「戦争に巻き込まれることは絶対がない」「いささかもない」「断じてない」などとよく言うわ。それに、集団的自衛権を行使するとなったら、どれぐらい私たちの税金が使われるんですか？

自衛隊の人たちの大切な命を論じているときに、カネの話か？と思われるかもしれないが、私はそれも心配だ。自衛隊の人たちにかかる保険金（小さい話だが、武器・弾薬、アメリカ軍に提供するものもろの後方支援にかかる経費、アメリカは払ってくれませんかよ。当然だわね。日本を守るためにやってくれているんだから（そういうことなんですよ？）

いまでさえ、私たちが掛けてきた年金が目減りしていて、「介護保険料」なんて理由つけて収入がない老人からまで取り立てるようなマネをしているのに…。安保法案改正で今後、日本はどれぐらい軍備に余分にカネを使うのだろうか。多分、まわりまわって世界の武器商人の懐に入っていく、私たちのかけがえのない老後の生活資金…。

国会中継をずっと見ているわけではないので、えらそうには言えないが、審議の場で、野党の議員が「カネ」のことを質している、という場面を見たことがな

い。新聞にも書いてないような気がする。しかし、そこをスルーすると、あとでエライことになる、というのは新国立競技場の計画を見ても明らかというものだ。もちろん、国を守るためにはカネがいるということぐらいは百歩譲って理解するけど、直接的軍備ではなく、平和的交渉のために使ってほしいってことなのだ。それにもし、戦争になったら、老後の生活資金どころか私たちみんなの「明日」

がなくなる可能性もあるのだ。その危機にストップをかけて！と頼れるのは現時点では参院だが、これも数に押されてしまいそうだ。本当に、この国の政治家はアテにならん。

しかし、私はアテになる人たちもいる！と思っている。日本のいまどきの若者たちだ。何万人もがデモに参加し、夜を徹して叫んでいる。「戦争、いらぬ！憲法、守れ！」。あの独特の節回しが頭から離れない。

若い保母さんが「うちで預かっている可愛い子供たちが戦争に行くようになったらイヤなので（デモに参加しました）」と街頭インタビューに答えていた。頼りはこの人たちだ。安保法案改正反対！

総理大臣は憲法を守れ！ いまの若い人たちは電子機器（表現が古かった！ネットのこと）に強い。世界中の若者たちに発信して、一夜にして「アベは軍国主義者、日本のリーダーとしてふさわしくない。消えろ！」という大きな波が世界中から押し寄せるかもしれない。首を洗って待つてる、アベシンゾウ！（A O）

世界一周旅行記（15）

マチュピチュは世界遺産No.1？

若山哲郎

ペルー三日目、二月三十日。いよいよ今日からペルーのハイライト、というより、日本の方々の期待を全て背負ってのマチュピチュ行き。なにせ世界遺産No.1なのですから。なんでも斜に考える私は例によって大いなる疑問があるのですが、今は頭が痛くてそれどころではないので後で述べます。

前日泊ったリマ市内のホテルをバスで出発したのが真っ暗けの午前三時。深夜二時起きです。バス三〇分でリマ空港へ。五時二〇分の便に乗るはずでしたが、チケットシステム故障で四〇分遅れで出発。一時間半かかってクスコ空港に着きました。問題はさらにここからの方が大変なのです。高度です。

クスコでなんといきなり三四〇〇メートル。ほぼ富士山。これには事前に注意がありました。高山病です。急に高い所へ行くと酸素不足のため発熱めまい頭痛が起こるといふもの。除々に登りなさい。ゆっくり行動しなさい。

でも飛行機で急に高地へ来ればどうなるの？ 富士山に飛行機で一気に降りればどうなるの？ 不安がいっぱいでした。対策は事前にそれ用の薬を飲む、水を多くとる、怒らない、慌てないなどです。でも、いきなり、それらに反して急いでバスに乗り替え二時間揺られっぱなし。着いたのがオリヤンタイタンポ駅。そ

これからまた高原列車で乗り換え二時間。きれいな景色に可愛い女性車掌さん。それはいいのですが、なにせまだ高度二五〇〇メートル。左側には大きな川が流れており、ちょうど保津川下りのトロッコ列車のイメージです。さて半分眠りながらやっと目的地マチュピチュ駅に着きました。まあ、来てみたらそこは有馬温泉みたいな所でした。

なんか表現として適切ではないかもしれませんが、要するに川と山と小さな街。このレストランでひと息入れてました。そしてこれからまだバスに乗りいよいよあこがれのマチュピチュへ。

しかし、有名な所へはそう簡単には行かせてもらえません。途中崖崩れのガタガタ道を三〇分。もうええわ、と思ってきました。遺跡のゲートに着きました。ここから入場。入場料は二三〇〇ソロス、四〇〇〇円。高つかあ、完全に足元見られています。

さてここからが私個人にとっての大問題。高所恐怖症なのです。日本にいるときに見た遺跡の写真は山の上、高い、危険、こわいです。じゃなんでここに来たのですか、単に勢いだけです。案の定、出だしから不安定な石の登り道、片側は絶壁。もう帰ろうと何度か思い、限界にきたころ女神があらわれました。親切な日本のご婦人方です。女性は強い。まっ、私が単になさけないだけかもしれません。役得？で手に手を取り合い、なんとか全て巡れました。さて、恐怖心のためよく見ていないのであまり偉そうに言えませ

んが、この遺跡がなぜ世界遺産人気No.1なのか以前から大いなる疑問をもっておりました。ここへ来たのはその検証でもあるのですが。

そもそもこの城らしきものは、一四〇〇年代に建設されているということ。古代インカ文明とは直接関係がありません。紀元前のエジプトのピラミッドやギリシヤ神殿なんかと比較するとかかなり新しい。日本では室町時代後期、戦国時代のころの建設物。

こんな石組の城なんて、日本だけではなく世界にはもっと立派なのがたくさんあります。テレビではよくインカの奇跡ってタイトルされているけど、なにが奇跡なのかよくわかりません。じゃ、山の上にあるからか。日本の天空の城、竹田城の方がもっと素晴らしい。ジブリ映画の「天空の城ラピュタ」のモデルだから。これも不正解、あれはガリバー旅行記の王国からとったもの。じゃ何が重要なのか、何に価値があるのか。ただ単に遠くから来るのが大変だから、景色が素晴らからだけでは単純過ぎます。勿体振らずに言いますと、それはこの文明が歴史実験の一つだったからです。

人類はアフリカに誕生し、一万年前に当時陸つづきだったベーリング海峡を渡り北米、南米大陸に定着したのです。その後、ベーリング海峡は渡れなくなり大陸は分断され独自の世界を作りつづけて十五世紀スペイン人達に征服される前まで繁栄をしていたのです。

もし私達が今当たり前とだと思ってい

るこの西欧化された文明が、世界を支配していなければ別の文明の型も人類は持てたのです。

さらにこのマチュピチュはどういうわけか奇跡的に一九一一年まで誰にも知られずに存在していたのです。西欧文明を代表するスペイン人達が、破壊しつくした異文明のその神秘にこそ価値があるわけです。

実際そうでなければここは大阪城よりはるかに小さい巨大な天守閣もないし、しよぼい所です。ただ高度二四〇〇メートル、前の山マチュピチュ(古い山)、後の山ワイナピチュ(若い山)ここ以後私にはワイナピチュさんと呼ばれました。(に囲まれた、壮大な景色にある稀有な遺跡であることだけは確かです。頑固なマチュピチュフリークの名誉のために。お前は怖がってもっと素晴らしい太陽の神殿や日時計などをよく見ていないのではないかと言われれば、その通り、素直に謝ります。御免なさい。

さて、ホツとしても来た道を戻ることに四時間以上、途中、わけのわからない民族レストランで食事をし、これまた高度三四〇〇メートルのクスコのホテルに着いたのが日が替わり深夜の一時。よく生きて来れた。

しかし頭ガンガン、空気が薄い。私は比較的ましでしたが、皆、酸素を吸引していました。世界一の遺産は世界一しんどい所でした。やっぱ行くのがつらいから世界遺産No.1やね。

素老人☆よもだ帳(17)

坂本一光

◆戦争法 TPP原発 新国立 偉い奴ほどよく眠る国

日本の未来が、明日の暮らしままならぬ、眠れぬ素老人の肩にかかっているとは決して思わないが、近頃、日本が偉い奴ほどよく眠る国であつていいのか、としきりに考えるようになった。同じような思いは、これまで何度もあつた。

二〇〇四年四月、小泉純一郎内閣のもとで国立大学が法人化されたとき、私は一地方国立大学の教員であつた。大学教育への国の関わり方は、一言で言えば、それは違ふと思つた。国民の税金で運営される国立大学であり、国民の高等教育に国が責任を果たすことと、高等教育の現場に国家が、たとえてみれば土足で踏み込むような介入をすることは、全く別の話であるだろう。法人化されれば教職員は非公務員型となることが決まったとき、就業規則を作成する段階で地方ブロックの「高級事務レベル」某グループから、現行の「国家公務員に対する政治活動の制限」内容はそのまま必ず就業規則に含めるように検討すべきであろうとのメールが、個別大学の「高級事務レベル」宛てに送信されてきたことがあつた。公務員の政治活動の制限自体何とも遅れた国にふさわしいことであるが、非公務

員型の職員とはこれまた一体何だと思つた。権力は、たとえ末端の権力であつても、そういうものなのだ、と肝に銘じたことである。その後、「教職員は何人といえども、銃刀剣類を所持して大学敷地内に立ち入ることを禁じる」という、法人化された国立大学の就業規則条文案を目にしたとき、私はもう驚かなかつた。「恥を知れ、誰がこんな条文を就業規則に入れるものか」と思つた（大学教員として私はそういう仕事も担当していたのだ）。今思い出しても、国民の税金で運営される部署で問題があるとすれば、まさしくこういう類のことを仕事としてやらざるを得ないことと、やらせる高等な上司が存在することであろう。しかし、それにしても、国立大学の法人化問題は国民にとつての大問題にはならなかつた。大学が国民に信頼されているか、または何ら関心を向ける存在でないか、あるいはその両方なのだろう。大学にいる者の無力を恥じるほかなかつた。

第一次安倍晋三内閣のもとで教育基本法が改正され、二〇〇六年十二月二十二日公布・施行されたときにも同じような思いがあつた。教育基本法について言えば、それに問題があるとすれば、その目指したものが時代に合わせて変わったことではなく、その目指したものが完全には実現していないことにある、と思えたからである。先に日本国憲法を制定しそのもとで教育は何を目指しどうあるべきか、

それを教育基本法は示していた。しかし、教育基本法改正問題も、国民にとつてどれほどの問題であつたか、私には理解できなかつた。教育の自由、学問の自由、それは個人の手の届くところで問題が発生しない限り、他人事である。誰がいつどこで何を学ぶか、それは個人の自由であり、そこに国家が介入することは許されない。憲法が保障する学問の自由とは、普通に言えばそういうことであり、学問の自由は大学の学者にだけ保障されるのではないのである。それにしても、教育への政治の介入は今に始まつたことではない長い歴史を持つてゐる。この国の政治は、このうえ何が欲しいのか。

こうした事情は、この間の日本国憲法を巡る問題にも通じる。憲法にもし問題があるとすれば、それが「押し付けられた」り、古臭くなつたりしたことでは全くなくて、その目指すものが完全には実現していない点にこそある、と私は考えてきた。平和についてもそのとおり。『平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した』と憲法前文は言う。専守防衛と称する自衛隊の設置と日米同盟の抑止力による平和保持は、この前文の精神から遙かに遠いところにあるだろうが、それでも政府は専守防衛の枠内にある限り憲法九条との整合性は保たれているとしてきた。解釈による改憲はそれ自体憲法違反であると私は考えるが、米ソの冷戦、

わが国の経済の高度成長などが進む中では、私もそうだが国民の多くは「このくらいは、まあええか」と深く考えることをしなかつたのだろう。その後、国連PKO活動やイラクへの自衛隊の海外派遣（派兵ではない）などが進むようになると、関連する法整備を含めてアメリカとの同盟下相やばいところまで日本が来ていると考えざるを得なくなつていた。

いよいよ憲法九条をはじめとする憲法の明文改正が政府の射程に入ったと見えた。戦争の放棄を規定した九条について、政府の解釈改憲はすでに極限に達していた。解釈改憲とは、条文はそのまま解釈で内容を変えるのだから、文字どおり違憲、少なくとも違憲の疑いを挟み得る状態である。憲法は自衛権に言及していないが、戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は永久にこれを放棄し、陸海空軍その他の戦力はこれを保持しないとされている。自衛隊を解釈による設置ではなく名実ともに合憲の軍隊にし、さらにその役割を日米安保条約のもとで飛躍的に拡大するために、政府に残された最後の道はいよいよ明文改憲に進むことだけである。それを提起するのはいつか。また、そのとき日本を戦争することができると『普通の国』にするために、最後の仕上げに残しておいた徴兵制をどう扱うか。

良心的兵役拒否の制度くらいは今時の「世界の一等国」としての体面上取り入れるだろうか、などと勝手に思いを巡ら

していた。そして、日本国憲法の明文改正が提起されたとき、国民はそれにどう反応するか。他の法律と同じように、黙つて見過ごすか。いや、それはいくらなんでもないだろう。少なくとも、七〇年前に日本の敗戦で終わった先の大戦の悲惨な戦禍、日本が加害者としてまた被害者として経験した戦禍を忘れ果ててしまふほど日本国民は愚かでない。それでは、そのとき国民は見識と良識をもつてどう応えるのか。他人事でなく、そもそもお前はどうか。

○憲法を暮らしの中に生かそうと

「ひとり九条の会」を始めぬ

これが、私の回答であつた。憲法は変える前にその目指したことをすべて実現しなければならぬ。それが政治の責任である。これだけは素老人の私にも譲れない、と腹を決めていた。因みに、「憲法を暮らしの中に生かそう」は、私が学生であつた頃、蜷川虎三知事率いる京都市政の政策理念であつた。虎さんが知事選に落選し「落城だな」と嘆いた後も、この標語は長い間、東山四条の角、円山公園沿いにある店の表に大きく掲げられていたが、いつの間にか降ろされなくなつてしまつた。また「ひとり九条の会」に込めた私の思いは、たった一人でも九条を壊すなどという意志は示すことができる、というものである。『魂は表現されなければ

ばそれが存在するかどうか、本人にとってさえはつきりしない』(加藤周一)という恐ろしい言葉があるし、かたちは心であり心はかたちになる、と私は思うからである。ひとりでも多くの人に、私は「ひとり九条の会」をやっているという意志表示をしてもらいたいのである。そこからすべては始まるとさえ思う。私は斯く身構えていた。

それが、おいおい、どうということだよ。政府は、二〇一四年七月一日の閣議決定で、安全保障を巡る国際情勢の変化により解釈改憲をさらに進め、専守防衛を超えて集団的自衛権を限定的ならば行使することができるとした。

○政権を投げた男のコントロールで世界を煙に巻き東京オリンピックを誘致した男の投げた球は、遂に
○政権を投げた男の危険球となつたのである。

○国民の審判受けなくす

○国禁の九条破る姑息な手

さて、周知のように、政府が提出しうでに衆議院を強行採決で通過した世に言う『戦争法案』によれば、憲法など変えなくても、米軍と一緒に限定的にせよ集団的自衛権を地球上いつでもどこでも発動することができるそうだ。「後方支援」をすることができるから、米軍の二軍として、だね。「政治家として責任を持って

国民の命を守る」と称し、戦後七〇年を対米従属七〇年として完成させ、新しい戦前元年を祝おうとしているのだろう。どうすれば政治はここまで墮落することができるのか、私はこの墮落、安倍晋三という現象を嗤い怒る。

○解釈は移りにけりないたずらに

海の向こうにシッポ振る間に

○風雲急告げてファッショと蟬も鳴き

○違憲違憲違憲最後の審判戦争法

嗤い怒りながら、同時に、この国の未来に揺るがぬ希望が見えるのも事実である。それは戦争法案が衆議院で強行採決されてから一層顕著になった、日本国民の見識と良識の發揮である。海鳴りのように国会を包む声が聞こえる。国会周辺に限らず、日本国中の至る所で、つまりは生活や仕事の場で、老いも若きも、自らが自らの声をあげている。国民の組織的な抵抗力があらゆる領域で削がれてきた中で、これはかつてなかった新しい国民の抵抗の姿である。国会の圧倒的多数派を国民の圧倒的多数派が呑み込んでいる現実がそこにはある。権力者がこれを無視できるなら無視すればいい。

○戦争法辺野古で退陣絵空事

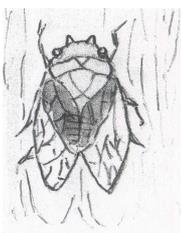
しかし、決して絵空事で終わらないだろう。安倍晋三内閣は、戦争法、沖縄・辺野古、原発再稼働、TPP、派遣法、

消費増税、社会保障削減等々、政権が幾つ吹っ飛んでもおかしくないアベノミス墮落政治をいつまで続けられると思っているのか。狂った多数派にはもはや軌道修正をする能力も残っていないか。

一九六〇年岸信介内閣が安保改定を強行突破して退陣し国民の前から逃亡したように、その孫である安倍晋三内閣も戦争法を強行して逃げるつもりか、と私は秘かに恐れる。彼の個人的な信念はそこまでの覚悟を決めているのではないか、そして、与党多数派からはそれを止める策も生まれないか、と。それは安倍晋三取り巻き議員グループの集団的自滅行為に等しいと思うが、最後には国民より我が身がかわいい議員たちのこと、どんな現象が起きるか見分に値するだろうが予断を持つことはできない。

怒りを少し静めるとよみがえる言葉がある。『どんな人間でも悪魔ではないのだから、私は死刑に反対し、戦争はどんな人間でも悪魔にするのだから、私は戦争に反対する』(加藤周一『続羊の歌』わが回想「五頁、岩波新書、一九六八年」、死刑を執行する国は戦争をする国になるのか。(かたちは心であり、心はかたちになる

■大分の素老人)



大人の今昔物語 (13)

石川吾郎

今回は、清水寺詣でに仕掛けられた危険な陰謀の話です。なかなかスリリングな展開です。教科書に出ない度は四／五。

清水の南の辺りに棲むを食、女を使い人を騙し殺す話 (巻二十九ノ二十八)

今は昔、その名は不明だが高い家柄の君達で、まだ年若くスタイルよくハンサムな者がいた。近衛の中將などであったのだろうか。

その人、お忍びで清水詣でに出かけたところ、すばらしく美形で着物の着こなしも上品な女が歩いて来るのに行き会った。中將この女を見て「身分のある方がお忍びで、わざと歩いて清水へ詣でているのだ」と合点した。女がふと顔を上げたのを見ると、歳のころは二十歳ばかり。なかなかの美貌でチャーミングなことこのうえない。

「いったいどんな女だろう。これは声掛けしないでないしよう、据え膳食わぬは武士の恥」と思うと、そわそわして他の事は目に入らなくなりました。

女が清水の本堂から出てくるのをうかがって、この中將、召使いの少年を呼んで、「あの女の帰る家を確かにみとどけよ」と命令して後をつけさせた。

* * *

さて中將、家に帰りついてしばらくの後、少年が戻って報告する。「確かに見届けてきました。家は都ではございません。

清水の南辺り、阿弥陀の峰（鳥辺山）の北の付近です。たいそうにぎやかで裕福そうにしている屋敷です。あの方のお供をしていた年配の女が、自分が後をつけてくるのに気づいて、『どうなさったの。後をおつけのようにお見受けしました。』と尋ねてくるので、『清水寺のお堂で、あなたさまをご覧になった殿が、あなたさまがお帰りになるところを確かめてこい』と仰せ付けられましたので、と申し上げると、『今後、もしこちらにおいでになることがあれば、私をお訪ねなさい』と申しました』と語る。中将、喜んで手紙をやると、この女は素晴らしい字の返事をよこした。

こうして、手紙のやり取りが度々になつてきたが、一通の返事に女の書くには「山里暮らしですので、京の都などに出ることはとてもありそうにありません。ですので、どうかこちらにおいでくださいませ。私が直接に簾越しにでもお話しいたしましょう」と言ってきた。中将はこの女に会いたい一心で、喜んで侍を二人ばかりとこの下使いの少年、それに馬の口取りを供にするだけで、夕暮れ時、暗くなるのをはかって馬に乗って京をしのび出ていった。

* * *

先方に行き着いて、使いをやり「しかじか」と案内を請わせたところ、下女が出てきて「こちらへおいでくださいませ」と案内するのでついていく。周囲の土堀は頑丈な作りで、門は高い。庭には深い堀に橋が渡してある。これを渡る際、お

供や馬などは堀の外の建物に控えさせた。中将一人、この橋を渡り入っていくと、いくつもの屋敷が並んでいる。その中で来客用とおぼしい所がある。妻戸がありそこから入って見ると、たいそう立派なしつらえで、屏風や几帳に、床には畳を敷き母屋の境には簾を掛けている。

山里なのに風情あるのを見て、中将なかなかものだと感心し、そこに休む。夜が更けて、女主が出てきて、几帳の内に入って臥した。親しい関係になって近くでまじまじ見れば、いよいよ愛しく思えてくる。

女にこがれる自分の心中を吐露し、将来を誓いなどしたが、この女、考えこむ風情。忍び泣きを泣くように思われる。中将は不審に思つて「お泣きになるのはなぜ？」と問う。女は「ただなんとなく」と言う。中将はさらにいぶかしく「今ではこんなに深い仲になったのですから、何もお隠しにならぬよう。さてどうしたというのです？尋常のご様子ではありませんか。」と、強引なほどに尋ねる。

女「申し上げないわけではございませんが、申し上げるだけでも心みだれることなので」と、泣きながら答える。中将さらに「さあ、おっしゃってください。もしや私が死ぬようなことでもあるのですか？」と言うと、女「もう、隠し通せませぬので申し上げます。私は都に住んでおりましたし、かじかという者の娘でございます。父母が死んでのち一人で住んでおりました。この家の主、乞食がた

いそう裕福に成り上がり、長年この清水

のあたりに住んでいる者でございますが、それが謀つて私を誘拐し、この家に監禁したのでございます。そして私を着飾らせ、ときどき清水寺に参詣させ、行き会つた男の方が私を見て恋心を起すと、このようにこの家に誘惑するのです。そしていざ寝ようとすると間に、天井から鉾をスルスルと下ろすので、それを私が男の方の胸にあてがつたときに刺し殺し、その着物を剥ぐのです。また供の方々も堀の外の家の中でみな刺し殺し、その着物を剥ぎ、乗り物を奪うのです。このようなこと、すでに二度になりました。これから先もこんなことが続くのでしよう。ですので、今度はあなたさまの代わりに、私とその鉾に刺されて死のうと思ひます。いますぐにお逃げくださいませ。お供の方々はもうみなさま殺されてしまつていのでしよう。ただ、もう二度とお会いできなと思うとそれが悲しい」と言つて、さめざめと泣く。

* * *

中将、これを聞いて茫然としてしまつた。しかし思い直して「実に奇つ怪なこと。私の身代わりになつていただくとは、ありがたいことだが、あなたを見捨てて一人逃げるわけには参りませぬ。こうなつては二人で逃げましょう」と中将が言うと、女「繰り返すういうことも考えましたが、鉾を下しても手応えがないとなると、すぐに下りてきて、二人ともいないことが露見すれば、必ずや追われて二人とも生きてはおられませぬ。ただあなたさまだけでも、生き延びて私の冥福

をお祈りくださいませ。これから先もこのような罪作りを重ねるのは耐えられませぬ。」中将「あなたが私の身代わりになろうとされるのに、どうしてあなたのご恩に報いないでおれましようか。それよりも、どうかして逃げましよう。」女「堀割りの橋は、あなたがお渡りになつてからすぐ、外してしまつてあると思ひますので、こちらの引き戸から出て、そちらの堀の狭くなつたところを跳び超えて、土堀に狭い水門がありますので、これから外へ這い出なさいませ。はやその時が近づいております。鉾が下ろされたら、私は自分の胸に押し当てて刺されて死にます。」と言ひ終わらぬうちに、奥の方から人の声が聞こえてくる。恐ろしさは身の凍るようだ。

* * *

中将、泣く泣く起きて、衣を一枚だけ引つけて、女が教えた引き戸からこっそり逃れ出て、堀を渡り水門を這つてくぐりだ。出たのはいいが、全く方向の見当がつかず、たまたま向いた方向へ走つた。すると後から人が追つてくる。「追つ手が来るな」と思い、無意識に振り返ると、なんと自分の召使いの少年なのだ。喜んで「どうしたんだ」と尋ねると、少年「殿が屋敷にお入りになるとたちまち橋を引き上げたのを、怪しい、と思ひまして、何とか堀を越えて逃げてまいりました。残りの者たちは、みな殺されたと聞きましたので、殿の身の上もどうなされたかと悲しく、そのまま引き返すこともようしないので、藪の中に身を隠して、

ともかくも「安否を確かめよう」と思っておりましたところへ、人が走つて参りま
したので、もしや殿では、と追いかけて
参つたらしいです」と。中将、これを聞
き、「こんなことになろうとは、恐ろしい
ことじゃ」と語りつつ、二人連れだつて
京の都の方角へそのまま走り逃げる。鴨
の河原の辺りに着いて振り返つて見ると、
例の屋敷の方角に、大きな火が出ている。

* * *

なんと、下手人が鉾を差し下ろして突
き殺したと思つたところが、いつもと違
い女の声もしないので、怪しんで急いで
下りてみると、男の姿は見えず、女を刺
し殺している。その下手人「男が逃げた
となると、すぐに俺が捕まってしまう」
と思ひ、まもなく屋敷に火を付けて逃げ
ていったのだつた。

中将はようよう家に帰りつき、使いの
少年に堅く口止めをし、自分もこの事件
についてはけつして人に語ることはな
かつた。ただ誰のためともいわずに、毎年
盛大に法要を行い、事件の当日に功德を
積んだ。これは例の女のためだつたのだ
らう。この経緯が世間に知られるよう
になつて、ある人が事件の家の跡には寺を
建てた。これは某寺といつて今に残つて
いる。

* * *

この話を振り返ると、この女の心ばえ
は、まことに尊いものだ。また使いの少
年もなかなか知恵を働かせた。こんな次
第であるから、美女を見て好き心をおこ
し、知らないところへ行くよつたことは、

この話しを聞いたら止めるべきだ、と人
が云つたと語り伝えられていることだ。

《コメント》

この話しは、清水詣でにまつわる犯罪
事件を扱っていますが、『今昔物語』有数
の大長編物語になっています。語りの展
開の意外さおもしろさ、構成の確かさで
ぐいぐいと読ませ、女の心根の哀れさが
伝わってきます。闇の中の大きな火災が、
この物語を鮮やかに象徴しています。ま
た中将が女を供養する後日談も、共感を
呼ぶところですよ。

それにしても色仕掛けで、綿密に計画
された犯罪に感心してしまいます。ここ
に闇の世界、乞食が登場します。乞食が
これほど組織的に勢力をもつていたとい
うのは、意外な気がします。また人を殺
す目的が、主に身に付けている着物と馬
などであることも、当時は着物が財産で
あつたことを物語っているように思いま
す。

著者の最後の論評の、あいかわらずの
おとぼけぶりは健在です。

哲学屋のつぶやき (14) 現代ギリシヤから世界を語る

祖蔵 哲

ギリシヤを語るにはやはり今日の経済
危機を避けては通れない。私がギリシヤ
を訪れたのは六月初旬。その時には七月
五日の国民投票は決まっていた。前日も
書いたが、旅行中には特に変わった動き
は見られなかった。交通機関、公共施設、
銀行等も平常であるしデモもない。ホテ
ルでのサービス、商店での対応など特に
他国と比べても変わることはない。壁の
落書きは多かつたが、それも他国と比較
しても特にということもない、

外国を旅すると日本という国自体が異
常に清潔な国に感じられる。政治的なポ
スターもそんなには掲示されていなか
つた。

そして日本に帰り、しばらくして投票
が実施され答えが出た。私たち日本人に
とつては大変意外なギリシヤ国民の意思
表示であつた。ギリシヤ人は働かない、
公務員が多い、そして税金をごまかす。
こんなギリシヤ評がマスコミを通じて流
されている中、何で自らの借金を返さな
いで開き直れるのかと誰でもが思う。

さらに助けの手を差し伸べているドイ
ツをなぜあれだけ非難できるのか理解し
がたい国民であると。結局、国民投票の
結果を脅しに借りている金を返さない

という理由にしようという駄々子にも似た
が幼稚な国であると思つたりもする。し
かしギリシヤの歴史と現在の国際経済情
勢を憂う者にとつてそれは真実ではない。
私はギリシヤ旅行中になんとか現地の
ギリシヤ人に現状を聞く機会がないか
うかがっていた。当然、ギリシヤ語はし
ゃべれないし、つたない英語力では微妙な
質問はできない。しかし、幸いに現地の
日本語ガイドがいた。もう20年以上も
ギリシヤに住んでいるという。意外な答
えが帰つてきた、ギリシヤ人はドイツを
信用していないという返事である。どう
いうことなのであるか。

前回は遺跡を巡つての古代ギリシヤの
歴史を辿つた。ギリシヤは紀元前三〇〇
〇年のエーゲ文明から始まる。その後ク
レタ、ミケーネ文明に引き継がれドーリ
ア人の南下により現在のトルコ西方とイ
タリア南部までおよぶ都市国家連合によ
るギリシヤ帝国が作られた。この時期、
紀元前五〇〇年頃がギリシヤ哲学の最高
期であり民主主義や数学、自然科学もい
わゆる西欧文明の基礎が作られた。

しかし紀元前四〇〇年頃マケドニアの
アレクサンダー大王に征服されてからの
ギリシヤはローマ、東ローマ帝国そして
オスマントルコと、一八三〇年に独立す
るまで長きに渡り主権をうばわれた植民
国家であつたのである。さらに一九四一
年ナチスドイツなどの枢軸国により分割



され戦後は冷戦期の影響をもろに受け軍事主義、社会主義政権などのもとで常に政治的混乱にあった。

ギリシャ哲学はローマが三二三年のミラノ勅令でキリスト教が公認されるまでヘレニズムの哲学として学問の中心であったがその後は忘れ去られた。再認識されたのは皮肉にも十字軍が、その聖地を回復するという理由で侵略したイスラム世界で温存されていたギリシャ哲学を発見してからである。このようにギリシャは文化的にも政治的にも西欧世界の中心であり辺境でもあり続けた。

これは前回でも述べたが、ギリシャが西洋世界と東洋世界の接点にあり文化、民族の流動地域であったという地理的、歴史的背景も大いに関係している。

このような背景の中にありギリシャのドイツに対する感情は他の西欧諸国がナチスドイツに対して抱く想い以上のものがある。それ以上にある思いは列強諸国による経済侵略の被害者意識である。

そもそもギリシャがユーロを導入したのは二〇〇四年十一月であるがこの時点ですでにユーロ加盟の経済的安定条件を満たしていなかったといわれている。

それが発覚したのが二〇一〇年に政権が交代した時である。次の年二〇一一年には今回と同じように国民投票を盾に支援策の取引をしている。その支援策実施の四年経過後の現在、事態は少しも改善

されていないのだ。

緊縮財政要求、景気低迷、失業率の増加、財政悪化、緊縮要求。この繰り返しの産業界がない、観光業と農業くらいである。

しかし国民が働かないというのは嘘であり、労働時間は日本と比べてもあまり変わらないくらい長い。しかし、日本にも言えることだが、労働時間が長いことが誇れることであろうか。

労働時間と勤勉との関係は古典的な感情だけのものである。私は欧州を旅してよく言われる。日本人は気の毒だ、なぜなら我々は休暇を十分に楽しんで君らと同じくらいの仕事をしていると。

さて、ギリシャにとってドイツは自国を喰い物にしている悪い国と見られていると日本人ガイドは言っていた。

ドイツの銀行はギリシャ国民に対して借金を勧めていると。テレビではカード会社がクレジットカードの宣伝をし、銀行はローンをどんどんと組むよう仕向けている。しかし借金が返せなくなるかもしれない国民にたいしてなぜ銀行が競って金を貸すのか。誰も返してもらえそうにない人に金は貸さない。

その秘密はこのようなものである。そもそも二〇〇四年にギリシャはすでに財政赤字がすすんでおりユーロへの加盟条件が満たしていないのに粉飾を指導したのは世界的な投資会社であると言われて

いる。この会社は負債を債権として処理できる商品をギリシャに売りつけ決算をごまかす手管を指南していたのである。

この投資会社の元重役が欧州中央銀行ECBの総裁と聞いて私も驚いた。つまり事態はこういうことである。国際金融資本とドイツという欧州の盟主が手を握りギリシャ等の弱者を餌食にしていると。こう言うとか陰謀説のように聞こえるが事実である。

二〇〇八年に起こった世界規模の経済危機リーマンショックは、サブプライムローンという信用力の低い低所得者向けの貸付不良から発生したということは覚えておられるであろう。これと同じことが国家単位で起こっているのである。

私は経済学者ではないので詳しいことはわからないが、こういった取引はいわゆるリスクを回避するヘッジ商品と言われ、そのリスクを分散するために実物の数字を変数に置き換え債権としているのだとか。これを考えた経済学者は一九九七年にノーベル賞を受賞しています。過去にも言われたことであるがまさしく死に体の動物に集る、禿鷹ファンドである。人間の知恵は恐ろしい。ノーベル賞という人類最高の理性がこのような行為を可能にするのである。

こういった金融商品で利潤をあげているのは巨大資本家である。本来、赤字になっているのは銀行である。しかしその銀行

の債権を買って助けているのが国家である。国家とは国民の集合であり税金により成り立っている。つまり現在は巨大資本家が国家を従属させているのである。

ドイツ国民はギリシャが怠惰である、そんな国になぜ金を貸すのかそして返さないと開き直っていると怒っている。しかしそのドイツもそのような事が言える資格はない。

ドイツは第二次大戦後二回も債務の半減の特典を受けている。戦後の復興促進のためである。ギリシャは景気後退のスパイラルに落ち込んでいる。やはりデフォルトを実施し構造的な経済立て直しをすべきである。デフォルトによって再建できた国は多くある。

そもそも統一通貨ユーロを導入して一番の利益を得ている一人勝ちの国は、ドイツであるというのは皆な知っている。安いユーロはドイツのような輸出主導国には圧倒的に有利である。そのような特権を得ている国が赤字国を支援するのは当たり前でありなんの遠慮もいらない。

単一通貨である円を使っている日本経済圏の鳥取県は、構造的な財政赤字である。東京資本の会社が、安い労働力を使用し富を全て中央に吸い上げているからである。日本国はその鳥取県を地方交付税で財政補完している。これを日本国民が不当だと抗議しているか。

デフォルトを恐れるのはドイツではな

く国際金融資本家である。しかし彼らの頭は我々の想像を超えている。このような危機でさえ自らの利益にできるのである。ドイツさえ彼らは支配できる。

我が「芥川だより」で現在話題のTPPであるが、筆者も書いておられるように最大の問題はISD条項にあります。

Investor-State Dispute. つまり、投資家対国家の紛争。投資家とはこの国際金融資本のことです。その拠点は米国ではありませんが彼らにそもそも国家の概念はありません。

アメリカ合衆国の建国精神は個人のための国家であり国家が個人を規制するという発想はありません。これが自由主義です。

でも待つてその前に民主主義ではないのという人もいます。民主主義というのは絶対主義や独裁主義に対する言葉で、単に国民に主権があるというだけで北朝鮮でも中国でもサウジアラビアでも形だけの選挙をして、国民の代表だといって政治をすればそれで民主主義になるのです。

その前に多数決という民主主義につきものの決め方があるじゃないのという人もいます。しかしこの多数決というのは民主主義と常にセットで登場しますが、必ずしも大多数の意見を反映させるシステムではないというのが、たとえば社会選択理論においてアローの不可能性定理

というもので証明されています。

よくマスコミの誘導や経済状況などの影響もあり多数決による議会制民主主義がうまく機能していないと言われますが、そうではなく制度そのものに大いなる欠陥があるということは自覚しなければなりません。だから選挙によって選ばれた者は決して全権を委託されたのではないのです。

古代ギリシャにおいてソクラテスは裁判で有罪にされ毒杯をあおって死んだとは有名な、ソクラテスの弁明、にありますね。あの時期アテネは完全な民主主義でした。そして史上もつとも民主的な憲法下にあつたドイツでナチスが独裁政権を確立したことはよく知られています。

資本主義というものは資本すなわち資源とそれを商品にかえ価値を与える労働力がありその二者から搾取し再生産する資本家という三セットで成り立っています。この三つのどれが欠けても資本主義は成り立ちません。

しかし現在、石油などの天然資源の枯渇や未開発地の減少といった資本の欠乏に加え、安い労働力を調達できる国際労働市場がなくなってきました。最後のフロンティアとされるアフリカも欧米はもとより中国といったかつて安価な労働力調達国によって開拓されつくしつづつあります。

こういった資本なき資本主義の状況に

あつて、彼ら国際金融資本家たちはどこから富みを得ようとしているのでしょうか。ここまで読んできて感の良い読者ならもうお分かりであると思います。そうです、バーチャル空間で富を得ることが、彼らが今やっていることです。

しかし実態経済を反映しない仮想空間での経済活動は必ず破綻します。それがバブル経済の仕組みなのです。そしてこのゲームの胴元である国際金融資本家が常に利益を得ています。これが現在の世界経済の構造です。もともと彼らには国籍はありません。国に従うのではなく国を従わせるのが彼らの自由の本質であるからです。

今月は本業をかなり逸脱し、しかも学説ならざる私見のみで筆を走らせてしまいました。皆様普段、新聞や雑誌などメディアではあまり聞きなれていない傾向の話をしましたので抵抗を持つたが多々おられると思います。深く反省しております。次回は本業に戻りまして、新自由主義の哲学的背景を考察してまいりたいと思っております。



サラリーマン渡世譚 (27)

明石幸次郎

引き継ぎ

転勤して二日目に東京出張とは予想外のことであつた。東京のM商事に十時半に着くためには、六時半前の新幹線か、伊丹発八時発の飛行機に乗らなければならない。Mさんは、打ち合わせ室にお茶を持ってきてくれたGさんに「すまんけど、旅行社のKさんに、明日十時に東京に着く新幹線を三人分手配して！」と頼んだ。Gさんは、「皆さん、禁煙席で三名掛けの並びで良いでしょうか？お帰りは、明日午後六時に明石さん達の歓迎会がありますから、新大阪に五時頃に着かれた方が良いでしょう。東京発一時半頃になりますが、それで良いですか」と、一つ頼んだら、その事の全体を掴み、きつちりとフォローする、それを自然とやってくる。

Gさんの応対に明石は感心して聞いていた。Mさんは「有難う。明石、お前、タバコは吸うのか？」と明石に聞いた「いえ、吸いません」と答えたら「禁煙席で頼むわ！三人掛けで良いよ、但し、俺は窓側で頼むわ」と切符の手配を頼んだ。N君に向かって「N、お前、明日の新幹線に乗り遅れるなよ。明石、お前は、何処に住んでるのや、遅刻するなよ」と言

われたので「帝塚山の社宅です。大丈夫です！」と答えたものの、今晚、人事部の同期のMと久し振りに、飲みに行く約束をしたことを思い出した。Mに急遽出張になったので、日程を変更して貰おうかと一瞬考えたが、Mが何か、話をしたがっていた顔を思い出し、又、先程挨拶に行つた時にK人事部長が、Mの事を気にしていたことが引っかけ、今晚は約束通りにMと飲みに行くことに、少し迷いながら、心の中で決めた。

Mさんは「明石、それとなあ、お前のカバン、ダサイぞ。ビジネスマンが持つような物と違うぞ。工場では、それで良かったかも知れんが、東京のM商事に行くのに、そんなカバンで行つたら、Mのヤツに馬鹿にされるぞ！」と行き成り、カバンを貶された。それは明石が弁当と本を入れるために、姉に吟味して神戸大丸で買った、革のバックであった。確かにビジネス用として買ったのではない。良く見れば、五年使つたので抱える箇所が黒ぼくなつていたが、まだ使えらると、今日の輸出部出勤日も、弁当は入れていないが、単行本を一冊入れて小脇に抱えて持つてきた物である。

「帰りに高島屋に寄つて、俺が持つてる様なアタシケースを買つて、それを明日持つて行けよ」と指示と言うか、命令口調で言われた。

明石はMさんの言い分に引かかった。愛用のカバンを持つて行けば、M商事の社員に馬鹿にされ、アタシケースであれば、馬鹿にされないのか？それは、Mさんが、ダサイカバンを小脇に抱えて行く明石を連れて行くことで、自分が商社マンに馬鹿にされ、恥ずかしい思いをすることを考えたのだと思つた。それは、Mさんの大商社に対する、又、商社マンに対するコンプレックスの表れと、人間を価値を学歴、家柄、地位、権力の有無、お金、外見、服装などで自分と比較して判断するタイプの人だと思つた。

そう考えたら、明石自身も馬鹿にされたんだなあ、偶々、Mさんと同じ大学出身の人事部のY係長が、亡くなった兄貴と友達で中学生の頃、勉強を教えてもらった事を自己紹介みたいに喋つた事とS工場資材課時代に、クレームの事でA産業出身の輸出部のT畑さんに貿易用語を並べ立て、シツパーのM商事にクレームノータイスを保険会社に出さして下さいと会議で言つたことが、隣の課に居るT畑さんであったので、輸出部に来て挨拶した時に「あの時は、工場の資材にお前みたいな、賢いことを言う奴が居るとは思わなかつたので、お前のことは、良く覚えてる」と笑いながら大きな声で言われた。それをMさんは聞いていて、自分のライバルのT畑にそんな事を言った

ことで、多少は、明石の値打ちをA級はないが、B級位に踏んでいたと思つた。

Mさんに言われて、N君のアタシケース、Tさんの持つてるアタシケース、又、回りの誰を見ても誰一人明石みたいな小脇に抱えるカバンを持つている社員はいなかつた。自分のカバンをよくよく見れば、今朝家を出る時に愚妻から「ちよつと、そのカバンはスーツには似合わないし、いつも小脇に抱えるので、スーツの脇も傷むし、カバンも黒くなつていくわよ？この際、新しい手提げカバンを高島屋で買ったら？」と言われたことを思い出した。その時は、愚妻に反発して、「輸出部の連中は、エエ恰好して、アタシケースを持つているが、俺はあんな、小さなアタシケースは持たへんで、このカバンがエエのや。自分は中味を充実させなければ、カバンは代えない」と愚妻に言つて出て来た。しかし、愚妻とMさんの二人から言われたことで、自分のカバンを良く見ると、何と薄汚れた皮のカバンであると気がついた。

終業時間が来ると直ぐに会社を出て、高島屋に行き、カバンを新調する気になつた。自分の信念などは、直ぐに他人が言われたことで変わるA級になれないB級サラリーマンだと思ひながら、自分の財布の中身は幾らあるかと考えた。今日の飲み代はあるが、カバン代はないと

思い、社内預金を下ろさないと万札は足りないと考えた。

さて、幾ら下ろそうかと思索して、Gさんに「社内預金を下ろしたいので、用紙を下さい」とGさん席に行つて頼んだ。Gさんは、「幾ら下ろされますか？明石さんの従業員番号と金額を教えて頂きまして、私が用紙に記入して、ここに明石さんのハンコを押して頂き、出納に行つて来ますか？」と親切に言われたが、二万円と言うのも気恥ずかしいので、「いいです。用紙さえ貰えば、自分で書いて出納に行つて来ますので」と応えたら、「明石さん、そんな事で遠慮させる方は、この課には、どなたもおられませんよ」と、やさしく、しとやかに、それでいて、押し付けがましくなく自然に言われた。少し考えて「Gさん、俺、経理と出納にいるYさんとIさんに転勤の挨拶に行くので、自分で行つて来ます」と、咄嗟に思い出したのは、YさんとIさんに、久し振りに顔を見せて、挨拶をしたかつた事を口実？に使つた。

その時、我ながら矢張り、自分は“小心B級サラリーマン”であるなあと思つて思つた。

その時、我ながら矢張り、自分は“小心B級サラリーマン”であるなあと思つて思つた。

「八月十五日」という表題を掲げると文章の内容は概ね方向性が予想されるに違いない。日本人なら、年齢に関わりなく、八月十五日にはなんらかの思い入れがあるものと決まっているのだから。一九四五年の八月十五日を直接体験で知る人は言うまでもないし、そうでなくてもさまざまな刷り込みが行われており、かの太平洋戦争とはなんだったのかを考える日ということになっていく。だが、そうした方向性が決められているのだとすれば、あえて背を向けてみたくなるのも天邪鬼の本性である。

たとえば「三五の夜中 新月の色、二千里の外 故人の心」とつぶやいてみよう。これは白楽天の「八月十五日の夜、禁中に独直し、月に対して元九を憶う」という律詩の頷聯（第三句と第四句）である。そして単に詩の一部というだけでなく、古来、朗詠でよく用いられてきた対句なのである。この詩の、中でもこの聯がとりたててピックアップされてきたのは、この七×二の十四文字に八月十五日の思いが集約されているからだ。そのあたりは、イマ風の習慣に浸っていると理解しづらいかも知れない。というのも、この八月十五日は旧暦の八月十五日すなわち中秋の名月を意味するものだからである。生活感覚に旧暦が染みついて

いると、八月十五日というだけで月が美しくなるころだろうなと直感レベルで思い到るものだが、新暦で生きる現代日本人なら終戦の日以外の情報はなかなか浮かんでこない。

そうした「八月十五日」だが、白楽天の詩を全文を書き出すと次のようになっている。

銀台金闕 夕べに沈沈ちんちん

独宿 相思うて翰林に在り

三五の夜中 新月の色

二千里の外 故人の心

清宮の東面は 煙波冷かに

浴殿の西頭は 鐘漏深し

猶恐る 清光同じく見えざらんことを

江陵は卑湿にして 秋陰足おおいし

「八月十五日の夜、禁中に独直し、月に對して元九を憶う」という題にもあるように、中秋の名月を眺めつつ、遠く離れた土地にいる元九（元愼）を懐かしむ内容である。華やかな宮殿の高楼群は夜の闇に沈んでいる。職場にひとり宿直するも、思い浮かぶは遠く離れた友の顔。彼がいる江陵の地は湿潤を極めるそうだから、この長安で眺めるような美しい月は見えないのではないだろうか……月が美しい夜には管弦の宴などが賑やかに催されるものだが、その一方で、月明かりの下、ひとり寂しく昔を懐かしむというのも、景物と人事の固定的な組み合わせである。かの在原業平が手の届かなくなっ

た恋人を慕って「月やあらぬ」と詠ったのも、八月十五日ではないにしても、月の光に搔きたてられた懐旧の情という構図で捉えることができる。

こうした月と孤独の組み合わせをより明確に描いたものといえば『源氏物語』須磨の巻がある。将来を囑望されていたがゆえに朝廷内での派閥闘争に巻き込まれ、関係者に累が及ぶことを怖れて都を離れることとなった光源氏だったが、須磨の地で迎えた八月十五日、懐旧の思いに浸ることしきりである。

月の華やかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりとおぼし出でて、殿上の御遊び恋しく、所々ながめ給ふらんかしと思ひやり給ふにつけても、月の顔のみまもられ給ふ。二千里の外、故人の心と誦じ給へる、例の涙もとどめられず。

『源氏物語』全編を通しての名場面と名高い須磨の一節である。後世には、石山寺で月を眺めながら紙に向かう紫式部の姿でイメージされる源氏物語起筆伝説を生み出す名場面中の名場面である。また江戸時代には「須磨源氏」という言葉も生まれている。これは名作であるとの評判を聞いて『源氏物語』を読み始めるも須磨の巻（五十四巻中の十二巻め）でやめてしまった人のことを指す。近世になって印刷技術が発達してくると、庶民でも古典に接することができるようになるのだが、そうすると古来名高いという

だけで『源氏物語』を手取る者も現れる。ところが作品は長大を極め、文体も難解、となると有名な須磨の場面までは読み進めたが、あるいは須磨の巻だけは読んだが、後は続かない。そうであるにもかかわらず、『源氏物語』を読んだとばかり吹聴する人をからかって、この言葉が使われる。現代風にいえば、トルストイの『戦争と平和』やブルーストの『失われた時を求めて』など、名作たる評価の確定している長編小説を数ページのダイジェストで読んで、いかにも全編を破したかのように振る舞う連中のことといえはいいだろうか。ちなみに、かくいう私は『戦争と平和』も『失われた時を求めて』も読んでいない。

ともあれ、一九四四年までに限定するのなら、八月十五日といえは、たとえそれが旧暦の日付であったとしても名月の夜、とりわけ『源氏物語』に描かれた須磨の月を思い起こすのが一般的だった。



『芥川だより』愛読者の皆様へ

綾部市 上田幸男

先日、本紙編集発行人の嘉明君に、彼の生まれ故郷、丹波の「道の駅」で久しぶりに出会った。卒業した中学校の同期会へ招かれた席上でのことである。もう還暦は過ぎて数年は経つというのに、中学生の時と変わらず、すこぶる意気軒昂でパワーにあふれていた。

昔から勉強も運動もよくできる目立つ子供ではあったが、良い意味で一癖も二癖もあり、正義感にあふれ探求心が強く、何か指示を与えたり説明したりすると、「なんで？」「そやけどなあー」と、よく言う子であった。その頃からオピニオン・リーダーとしての素質は十分にあったが、同期会冒頭で発起人の代表として開会の挨拶をした時も、機知に富み、出席者全員を自分のペースに引き込み笑わせながら、最近、自分の奥さんや周囲の人たちに、「ありがとう、愛してる、と折にふれ言うようにしている。皆さんも是非そうして下さい」などと訴え、拍手を浴びていた。

その席で彼が私にくれたエッセイ集『夜道』は、自分と自分の周辺を見まわして書いたものだが、変にひねくれもせず、卑下もへつらいもせず、のびのびと描いている点が素晴らしい。自伝的な感じだったが、なかなか面白く一気に読ん

だ。年齢的には私より十五、六歳は年下だが、彼の少年期の状況は、私が過ごした丹波の風景や人心とよく似ていたようで、共感できる点が多かった。かつては、将来を嘱望された大企業のエリート社員で、海外でも活躍していたようだが、思うところあつてか、その安定した地位を捨て、大阪の衛星都市で自由奔放に生きていくようだ。周りの人々との繋がりを大切に頑張っているのが、彼らしい。

「思うこと言わざるは、腹ふくるるわざなり」を地で行っているのだろう。願わくは、『夜道』の一章「気になる他人の目」に本人が書いているように、故郷に住む九十余歳の母上のことを気遣いながら、自分の思ったことを周りの人々にどんどん伝え、自分に正直な生き方をしてくれんことを！

後になりましたが、月刊新聞「芥川だより」を読み、彼を支えて頂いている皆様に感謝申し上げますと共に、彼が世のため、人のために立ち上がろうとする時は、これまで以上に応援して頂き、暴走しそうなことがあれば、「そんなことはお母さんに心配をかけるからやめろ」と言い、失敗して落ち込むことがあれば、「また明日があるさ」と、励まして頂きますようにお願いして、遠い昔、嘉明君と関わったことのある、傘寿老人のたわごとを終えさせていただきます。

編集後記

暑中お見舞いもうしあげます。

毎日、暑い日が続きます。日本も亜熱帯性気候になった感じです。先日、アフリカから来ている留学生が、日本の蒸し暑い夏には、お手上げだと言っている、と京都に住む知り合いが言っておられました。

先日、知り合いからお誘いを受け、七月の三十一日、夜から愛宕山に登ってきました。千日参りの愛宕山は凄かったです。

暑さ、人の多さ、護摩供養、朝御饗祭…。おそろしい数の人々が次から次へと登ってきます。その数は数千を超え、数万ではないかと思えます。

夏の夜の不思議な光景です。女男は六対四くらい、平均年齢は四〇歳位。若い女性が汗まみれになって登ってきて境内の地べたに座ったり寝たりして一夜を過ごします。若い女の子のたくましさを見て、日本の将来も大丈夫だと確信しました。

友人達と、夕方六時に清滝を出発して九時に愛宕神社に着き、九時からの護摩供養を見学した後、境内の敷石に腰掛けて待つこと5時間、夜中の二時の神事に参列し不動で立つこと一時間、すべてが初めての経験で妙に感じ入るところがありました。

寝ずに歩き、立ち通しで、夜間飛行でもしているような不思議な気分でした。

皆さんの分もお祈りしてきましたから、千日は無病息災で暮らして頂けると思います。(嘉)

M E M O

一人では生きられない

想像力がないと書けないし、経験しないとわからない苦しみがあ

る。 会えば必ず別れがある。生きて

いる者は、いつかはあの世へ。年のせい

かつくづく思う 「一人では生きられない」ということ。大勢の人との出会い。そしてじつくりと話をきいてくれる人、出来る事は助けてくれる人、すぐ飛んで来てくれる人。

自分には何一つ出来ないけれど、静かに考える時に「充分じゃないの、しあわせじゃない」、もうこの

辺で手を打って喜ぶべきだよという声が聞こえてくる。

あじさい寺へ 関西花の寺25カ所霊場の観音寺へ。散る花故に今咲く花が美しい。

どんよりした梅雨の空の下、濃い青空を思わせるブルー、紫、白、ピンクなどいっせいに私達を迎えてくれた。 雨にうたれて 輝くあじさいのように

苦しみ 悲しみに打たれても 負けない老いの姿でありたい また来年もきつとあじさいを見に来るからネ。

亡き父の整理品から

父の形見と思っている寅さんのような古いトランクの中身、実父が大切な書類を入れていたらしい。実弟から、中身は長姉の好みのものばかりだから、と言って整理して私宅へ届いた。

明治時代の父の成績簿 (現在の通知簿)

国語読本より

梅干の唄

一月二月は花ざかり うぐいす鳴いた春の日の 楽しいときも夢の中 五月六月実がなれば 枝からふるい落とされて 塩につかかってからくなり しそにそまって赤くなり 三日三晩の土用干し 思えばつらいことばかり しわはよつても若い気で 小さい君子の仲間入り 運動会にもついてゆく

こんなのを目にすると一日ボーツ としていもう私である。

あんたは他人やで

男は台所に入るものではない。洗濯はしなくていい。こんな言葉は、現代はどこかへとんでいったらしい。

昔のこと、ただし女には。嫁入りしたら、義父母、弟妹たちの面倒を見る。家風にはしたがうこと。これは長男の嫁の仕事。

或る日、二人の小姑から電話あり、一人は主人が亡くなったこと、末妹は主人の老々介護で困っているとのこと。

私に何がしたいのか。心をえぐられたあの一言が浮かんできた。

「あんたは他人やで」

親の死後、相続の件、財産分与で弟妹たちが集まり、私も家族の顔で坐っていたら、突然、義弟から

「あんたは他人でっせ、この席でてくれ」といわれ、目の前がくらくらとして場をはなれた事を思い出した。傷ついた心は永久に消えない。

あくまで他人であることに変わりはない。仏壇から私の顔を見ている主人に私は誰と問いかけている。

俳句

土田 裕

開発の山河を追はれ夏燕

片蔭を出て片蔭を目指しけり

二人して山にアタックかき氷

座布団に

足りて坊やの昼寝かな

人も木も 二雨を待つ炎暑かな

